

孤独の淋しさのなか ひとりにさせぬ弥陀のぬくもり

今から48年前にもなりますが、学生時代に父の実家がある島根県へ一人旅をしました。京都から松江に行き、中国山地へ向かって各駅停車の列車でトコトコ走ります。当時すでに過疎化が進んでいた島根県でしたが、沿線に廃寺がそこかしこにあるのは変驚きました。

その後、NHKで「寺が消える」という特別番組が作られました。過疎化にあつて住民（檀家）が激減した寺院では経済的に困窮し運営することが出来なくなり、廃寺となつていくさまを収録した番組です。



ある大きな農家に一人暮らしをしてい

るおばあさんの所へテレビの取材クルーが

訪ねていき、「こんな大きな家に一人暮

らして寂しくないですか？」と尋ねまし

た。おばあさんは奥の仏間にあるお仏

壇の方を見ながら「阿弥陀さんと一緒

だから寂しくありませんよ」、とにつこ

りと微笑みながら答えたのでした。子

供達は都会へ出て行つて孫にも会えない

孤独な一人暮らし、車も無い、コンビニ

も無い、無い無いづくしの日暮らしにあつ

ても、「寂しくない、幸せだ」と言い切

れるものは何なのか、その番組が放映さ

れて随分と時が経（た）つにもかかわら

ず、忘れられない一コマとして私の脳裏

に焼きついています。

これから私も老いを深めていつて、思

い通りにならない事、当てが外れること

が増えてくると思ひますが、あのおばあ

さんのような生き方をしていくことが出

人生を歩むことが出来ると思ふのです。

「如来さんはどこにおる 如来さん

はここ（心）におる

才市が心に満ち満ちて なむあみだ

ぶつを申しているよ」

同じ島根県の妙好人と言われた浅原

才市さんの言葉です。阿弥陀さまはい

つでもどこでも私を救うと誓われた、

「はたらき」そのものです。

親鸞聖人は当時90歳でお亡くなりにな

られました。晩年は「目もみえず候

ふ。なにごとみみなわすれて候ふ（親

鸞聖人御消息）」と老いを深められ、

今際の際（いまわのきわ）には「口に世

事をまじへず、ただ仏恩のふかきこと

のぶ。声に余言をあらはさず、もつぱ

ら称名たゆることなし（「御伝抄」）、

とお念仏と共に生きた人生をお念仏と

共に終えられていかれました。

阿弥陀さまは、孤独を抱えながら生

きる時も、

命終を前にした今際の際（い

まわのきわ）も「あなたを一人にはさせ

ぬ、わたしがここにいるよ」と私を包ん

で下さっています。